

2025年4月7日発行

神戸学院大学図書館 展示会通信第75号

Meridian

第七五回有瀬図書館ギャラリー展

蔦屋重三郎の

おしごと

蔦重に見出された

絵師・作家たち

入場無料

2025.4.1(火)→6.23(月)

有瀬図書館本館2階エントランスコーナー



*開催時間や開催期間は変更になることがあります。図書館HPにて、ご確認のうえご来館ください。

つた や じゅう さぶ ろう

蔦屋重三郎 [1750—1797]



江戸後期の江戸の出版業者。

本姓は喜多川、名は珂理。重三郎は通称で、屋号を蔦屋、耕書堂としました。

商標は富士山形に蔦の葉。1772～1781(安永元)ころ吉原大門口で細見屋を開業し、1783年(天明3)には通油町に進出して地本問屋となります。時代の嗜好を適切に読み取る企画力に優れ、さらに大田南畝(蜀山人)、山東京伝ら一流の狂歌師、戯作者の協力を得て、草双紙、絵本、狂歌本類の名作を次々と出版。かたわら錦絵の版行にも意欲をみせました。

新人発掘の名人で、曲亭馬琴(滝沢馬琴)、十返舎一九のほか、美人画の喜多川歌麿、役者絵の東洲斎写楽など多くの逸材を世に送り出しました。江戸一流の版元として実績を残しましたが、没後番頭の勇助が2代目を継ぎ、明治初めの5代目まで続けました。

つた や じゅうざぶろう

よし わら さいけん

江戸の風雲児、蔦谷重三郎と吉原細見

『吉原細見』は、吉原の遊女や芸者の、名前や位付などの情報を載せたガイドブック的なものを指します。当時有力な版元であった鶴鱗堂版『吉原細見』の卸売りから始まり、その後版權を入手し、ページを減らして価格を抑えるなど、様々な工夫をして1783年(天明3)

始めまでに出版を独占するほどになりました。これには、吉原育ちの地縁が生かされ、蔦重の出版した『吉原細見』は正確な情報が掲載されたと言われています。



き びょうし しゃ れ ほん

黄表紙と洒落本、江戸の名版元への躍進

吉原細見で成功を収めた蔦重は、事業拡大のため浄瑠璃の台本や、往来物(手習いや稽古事の教科書)の出版も手掛けるようになり、その後徐々に人気を集めていた黄表紙や、洒落本の出版に新規参入します。

黄表紙が、滑稽な発想の物語に当時の時事や風刺を織り込んだ絵草子なのに対し、洒落本は、遊郭を舞台に恋愛の駆け引きを面白おかしく描いたり、裏事情を紹介する会話中心の戯作を指します。



蔦重と狂歌

黄表紙や洒落本などの戯作と並んで、当時江戸で流行してたのが狂歌です。狂歌は、和歌と同様に五・七・五・七・七の形式で詠み、内容は俗世的な機知や滑稽を歌うものでした。狂歌師たちは「連」と呼ばれるサークルで活動し、蔦重自身も「蔦唐丸」と名乗って「吉原連」に加わりました。蔦重は狂歌を楽しむだけでなく、狂歌本の出版に取り組みます。中でも、絵と狂歌を合わせた狂歌絵本は評判になりました。



寛政の改革と出版統制

蔦重の手掛ける黄表紙、洒落本、狂歌絵本などが大繁盛していた天明7(1787)年頃、松平定信による寛政の改革が始まり、華美な風俗の取り締まりや武士の綱紀粛正が図られました。そんな中、蔦重は世相の変化を逆手にとり、朋誠堂喜三二や恋川春町の改革を茶化するような戯作を出版しました。どちらも好評を博しましたが、改革政治で混乱する武士や政策への揶揄を含んだために藩の叱責や幕府からの召喚に遭い、結果的に作家が退陣する事態に発展しました。作家が次々と退陣する中、山東京伝は戯作を続けましたが、寛政3(1791)年に出した洒落本『仕懸文庫』『青楼昼之世界錦之裏』等で処罰されます。蔦重は身代(財産)の半減、京伝は手鎖50日とされています。この頃から黄表紙の内容は滑稽を楽しむものから教訓的なものに移行し、洒落本だけでなく蔦重の出版そのものが、縮小していく結果となりました。

起死回生！ 蔦重の浮世絵プロデュース

出版統制で処罰を受けた寛政3(1791)年頃から、蔦重は浮世絵の出版を本格化させました。これまでの戯作の挿絵や狂歌絵本で活躍した、喜多川歌麿を起用して美人画を出版していきます。歌麿が描いた大首絵は上半身を強調したもので、全身画が主流だった当時の美人画と比べインパクトがありました。精緻な絵画に秀でた歌麿は、わずかな表情の機微までを大首絵で表現しました。大首絵でも評判になった歌麿は、次第に蔦重以外の版元から浮世絵を出版するようになります。この時期にあたる寛政6(1794)年頃から、蔦重は出自不明の浮世絵師、東洲斎写楽の浮世絵を出版します。写楽はわずか10か月間の活動で140点もの浮世絵を制作したと言われています。幕府の処罰を受けながらも、出版者として活躍してきた蔦重でしたが、寛政9(1797)年、病により48歳で世を去ります。吉原の貸本屋から一代で江戸を代表する版元となった蔦重は、戯作者や画家を巧みに巻き込んで流行を先導した、まさに時代の風雲児であったと言えます。

蔦重と関わりの深い浮世絵師



東洲斎写楽 [生没年不詳]

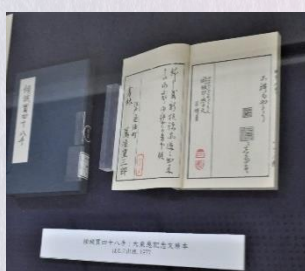
江戸後期に活躍した浮世絵師。生没年不明で「謎の浮世絵師」としても有名。版画作品142枚はいずれも蔦屋を版元としています。

喜多川歌麿 [1753?—1806]

新興の版元蔦屋重三郎に才能を認められ、豪華な多色摺りの狂歌絵本を次々と蔦屋から発表し写実的な作風に磨きをかけました。



展示の様子



編集後記

第75回有瀬図書館ギャラリー展では、「蔦屋重三郎のおしごと〜蔦重に見いだされた絵師・作家たち〜」と題して、2025年大河ドラマ主人公としても話題となっている「江戸の出版プロデューサー」蔦屋重三郎に関連する絵師たちの作品などを集めました。喜多川歌麿、東洲斎写楽、葛飾北斎…誰しも一度は聞いたことがある絵師が活躍し、「浮世絵」が流行した江戸後期。江戸の一大版元として数々の才能を見出したのが蔦屋重三郎です。今回はそんな蔦重と関連の深い絵師が描いた鮮やかな浮世絵に加え、かつて彼の店で番頭として働き、のちに人気作家として名を馳せる戯作者・曲亭馬琴の「南総里見八犬伝」なども展示しています。

参考文献

日本大百科全書(ニッポニカ)、デジタル大辞泉
日本国語大辞典 国立国会図書館 NDLギャラリー
(https://ndlsearch.ndl.go.jp/gallery/gallery_exhibitions)
蔦屋重三郎と葛飾北斎の浮世絵／ホームメイト
(<https://www.meihakku.jp/berabou/tsutaz.ju-hokusai-ukiyo/>)

展示では、滝沢馬琴の「南総里見八犬伝」も展示しています！ぜひご覧ください！

神戸学院大学図書館展示会通信 Meridian第75号
2025年4月7日発行

発行・編集：神戸学院大学 有瀬図書館
〒651-2180 神戸市西区伊川谷町有瀬518

TEL：078(974)4584 E-mail:pub-lib@j.kobegakuin.ac.jp

ホームページURL: <http://opac.kobegakuin.ac.jp/>

